

ている。

江戸時代には二十四文徴収し石風呂の湯屋や庵寺宮繕費に充てた。(延享五(一七四八)年、時宗総本山・清浄光寺に松寿庵の「末寺願」を提出した文書)

昭和の末には百五十円、その後二百八十円、平成十八(二〇〇六)年、隣地に新蒸湯を建築し雰囲気は一変した。また、入浴料は五〇〇円となった。新蒸し湯敷地内に無料の足蒸し湯が併設されている。

洪の湯Ⅱ 一遍上人開設と伝える。元は蒸し湯に隣接していた元湯であるという。俗に有命(いさ)湯という。お湯に生命でもあるように湯色が一定せず、ある時は白く、また灰白色に、藍色に、時には紺色に変じたという。

現在の洪の湯は温泉山永福寺下にあり、裏には境内から流れ落ちる滝湯跡がある。その崖には日光月光両菩薩の磨崖仏と太陽を表す円と三日月が彫られている。かつては滝に打たれる人で大混雑をしていたという。

熱の湯Ⅱ 一遍上人開設と伝える。当初浴舎はなかったと

いう。一名「浮の湯」また「怒の湯」ともいう。また「金の湯」とも称している。「鉄輪蒸簀及両温泉分析並医療効果」には、「熱の湯は身熱を除く去するの謂なり。古之を兎狩湯(うかりゆ)と称す。中古以来熱の湯と改称す。」とある。この近辺の小字名はウカリユである。ちなみに蒸し湯近辺は風呂本であり、多くの温泉地にある湯元ではない。石風呂からか。

現在の熱の湯は、大変熱いので有名であるが、かつては熱を取る湯であったという。また、数少なくなった無料開放温泉である。

鉄輪の温泉 現在の鉄輪地区の共同温泉の紹介。

市営無料温泉 熱の湯

市営有料温泉 蒸し湯

区営組合営温泉 洪の湯・筋湯・上人湯・地獄原温泉・谷の湯・砂原温泉

私有私営温泉 ひょうたん温泉・鬼石の湯・夢たまで筈・

やまなみの湯・その他旅館及びホテルの

立ち寄り湯

組合員のみ温泉（一般利用不可）

大師温泉・湯の川温泉

地獄蒸し料理・地獄釜

地獄蒸し料理は伝統料理となっているが、菡海漁談には「此里には地獄と称する沸熱の泉甚多く、或は人家の壁柱の根などにも煙を出す所あり。菜蔬を煮、麻苧を蒸などの用に供して便利なり。」と記している。

また隣村の鶴見村についての記録『鶴見七湯栖記』（伊嶋重枝（直江雄八郎）弘化二（一八四五）年）には、地獄蒸し料理が紹介されている。それには、「きぬかつぎ（はじきいも）」「里芋の小芋」、「蒸し琉球芋（八里半）」、「行成餅」「ほどよく練った小麦粉で琉球芋を包み蒸す。すぐできるのでイキナリ餅か、「地獄蒸し軽羹」「山芋・うる粉・砂糖」、「地獄蒸し椿餅」「葛粉・餅粉・砂糖・醤油、蒸しあがった後その下に椿の葉をつける。「赤飯また年の暮れの餅など、みなかくのごとく蒸し立つる事なり」と地獄蒸し料理がつくられていたことが知られる。

最近では地獄蒸しプリンが各施設でつくられ名物になっ

てきた。地獄蒸し豚まんも定着している。

鉄輪では、旅館や貸間また各温泉施設や食堂に地獄釜が設けられており、気軽に地獄蒸し料理が楽しめる。鉄輪中心部に「地獄蒸し工房 鉄輪」が開設され、休日や好天気の日には多くの観光客が「地獄釜」の順番待ちをし、地獄蒸し料理を楽しんでいる。

また最近、低温蒸しの料理方法が研究され新しい名物になりつつある

かしま（貸間）

部屋だけ貸して宿泊客が自分で賄いをする宿泊施設であり、長期滞在客が多い。客は「地獄釜」で料理を作り、各温泉に入湯する。一時期は大変多かったが、最近は食事付きを希望する人が多くなり、旅館・民宿を兼業するようになってきている。

旅館

江戸時代からの旅館は八軒あったといわれるが、旅館業としての建造物は姿を消した。富士屋旅館が「国登録有形文化財」として明治時代の建築物を残している。現在は「富

士屋ギャラリー 一也百(はなやもも)としてリニュー
ウアルされている。

鉄輪中心部の旅館は一部を除き小規模が多い。大規模ホ
テルは九州横断道路沿いに建っている。

温泉山永福寺

鉄輪地区の史跡・歴史・伝承では、温泉山永福寺に触れ
なければならぬ。この寺はもと「温泉山松寿庵」と称し、
一遍上人開基と伝えられている。

前述のように、建治三(一二七七)年、一遍上人が鉄
輪を開いた時、松寿庵寺を残したと云う。その後、応永
元(一三九四)年に鉄輪松寿庵が再興されたという。江戸
時代には、延享五(一七四八)年二月九日付で時宗総本
山・清浄光寺に「末寺願」が提出され、宝暦六(一七五六)
年住職が派遣された。その後、明治四(一八七一)年住
職の死亡の届け出がなく、廃寺扱いとなった。明治十八
(一八八五)年「廃庵再興願」を県に提出し、その時、「温
泉山松寿庵由緒書」を添付している。六年後の明治二十四
(一八九一)年、永福寺の寺号を借りて「温泉山永福寺」
として再興された。

末寺願の中に「一遍上人様が御自作像を造立された。村
中の尊崇を集め、(一遍忌日)の八月二十三日に御法事を
仕り」とあるが、現在は、秋の彼岸にその自作と伝えられ
る一遍上人像を湯あみさせる「湯あみ祭り」として法事を
再興している。

「温泉山松寿庵由緒書」を載せておきます。

人王十二代後宇多帝御宇建治二年丙子年秋、時宗祖一遍上
人念仏勧進ノ為豊後国ニ渡来シ、海部・大分両郡ヲ教化シ
尚速見・国東郡ノ教化ノ為横灘野口ノ里ニ来リ、尚北ニ進
マント欲シ玉フニ道路相分カラズ、故ニ徨居リ玉フ所ニ老
翁一人現レ告テ曰ク、道路ノ明カナラサルハ鶴見嶽ノ朝露
ト鉄輪地獄ノ焰烟ト一団円トナリ、毎朝如此、彼ノ群山ニ
突出シタルハ鶴見カ嶽ニテ紀州熊野太神ノ影向ノ地ナリ、
麓ニ社アリ、其左ニ焰烟ノ立登ルハ鉄輪地獄ノ焰烟ナリ、
言終テ翁消失セリ、上人以為ラク、彼ノ鉄輪地獄ヲ埋メテ
往来人ヲ助ケン、且彼翁ハ熊野太神ナラント、彼ノ社ニ
詣テ三七之間鉄輪地獄填埋セン事ヲ祈願シ玉フニ太神告ケ
玉ハク、鉄輪地獄ヲ埋メン事人力ノ及フ処ニ非ズ、法徳ニ
非ズンバ難シ、故に大乘経ヲ石ニ書写シ填埋セバ如何ナル

焰烟、動々タル数十匁ノ鉄輪地獄モ必ズ鎮マルベシト、上人告ノ如ク成シ玉フニ、僅カニ一間四方ニ全リ如何ヨウ成シ玉フモ湯氣止マラズ、斯ニ於テ亦太神ニ祈願アリシカハ示シテ曰ク、三間四方湯氣止マラザルハ之ハ是レ法徳ノ然ラ令ヘキ者ニシテ、今ハ毒熱湯相變シ良薬ト成レル者ナレハ、此ノ湯氣ニ触レル者ハ日来ノ疲ヲ休ム而已ナラス諸病悉皆消除セント、斯ハ此レ蒸湯開闢之元因ナリ、此時兵庫頭大友泰頼（頼泰）入道、上人深ク帰依シ一字ヲ建築シ奉リ上人ニ寺号ヲ請フ、上人温泉ト幼名松寿丸ヲ象リテ温泉山松寿寺ト名称シ玉ヘリ、斯ニ於テ温泉守護末代衆生結縁ノ為メ手ツ柄自像ヲ彫シテ置キ玉ヘリ、又堂前ニ六七寸之楠アリ、爪ニテ弥陀六字ノ名号ヲ切付誓テ曰ク、我称名勸進之旨趣不違仏意不背神虜者期樹次第繁茂迄末代、随テ巨大也ト、果シテ誓ノ如ク三百有余年ヲ歴テ楠七抱余ニ到レリ、故ニ名号ノ肉体モ從テ巨大ト成レリ、寺門モ亦繁茂ニ成リシカ、其頃大友義鎮公後子宗麟ト云フ、耶蘇教ヲ信仰シ国内神社仏閣ヲ多分廢壞セリ、松寿寺復タ此ノ難ニ罹リ寺門ヲ廢スト雖モ、村民蒸湯開闢ノ洪恩ヲ思ヒ、草庵ヲ結び上人ノ遺像ニ仕ヘリ、而シテ百六十余年ヲ過ギ宝曆年間ニ至リ、時宗総本山相模国藤沢山清浄光寺ニ直轄鉄輪村内

ヨリ願立シ処、本山ヨリハ淳盈和尚ヲ住職ニ下セリ、併シヨリ十二代専秀和尚マテ連綿相續セシ処、明治四辛未年十一月廿三日惠秀和尚死亡セシ後、住職撰定中無住無檀寺院廢止之御成規ニ触レ廢セラレ候云々

右の由緒書聊カ相達無之候也

再建擔当人

河野智元

湯けむり景観

鉄輪といえは湯けむりというイメージが定着している。昔は共同浴場の周辺に宿泊施設が設けられていたが、内湯が当然となり各旅館や貸間は地獄・温泉を備え各施設から湯けむりが立ち上っている。休日や休前日は、夜間ライトアップなどを行っている。

残したい風景に選ばれたりして有名になった。その景観を見るために「湯けむり展望台」が鉄輪の東の高台に設けられた。扇山火まつりの撮影地として、当日はカメラが林立している。湯けむり景観を残すために鉄輪中心地は建築制限などを受けている。

現在、市では国指定の「文化的景観」（文化財保護法で定められた文化財の一種で、人々の生活や生業といった日々の営みと、風土によって形作られた景勝地）の選定を受けようとしている。その第一期として、鉄輪地区と明礬地区を選んでいる。（パンフレット参照）

※なお、平成二十四年九月十九日付けで「別府の湯けむり温泉地景観」として「重要文化的景観」に選定されました。



文化的景観
別府の湯けむり景観



※別府市内の鉄輪地区と明礬地区を第1期として、選定をめざしています。（下記参照）



※このパンフレットは、道のまち別府ふるさと広域研究会の一部を利用して作成しています。

別府市教育庁生涯学習課
〒874-8511 別府市上野口町1番15号
電話 0977-21-1111
FAX 0977-22-5100

他の文化財との違いは？

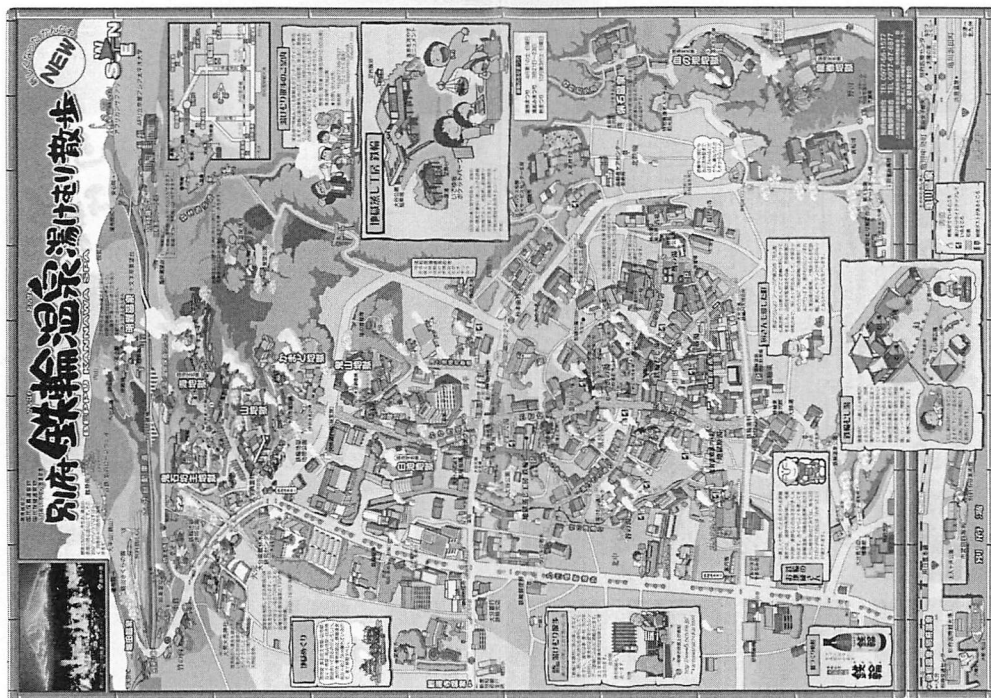
市内には、古くから伝わる建築物や石塔、名勝などの目に残るものから、技術など目に残さないものまで様々な文化財があります。文化的景観は、そのような個別の文化財も含んだ大きな枠として捉えることができます。



湯地獄（国指定名勝「別府の地獄」）



別府市立美術館文化財
【別府明礬温泉の湯の製法技術】
（写真は湯の蔵小屋）



史料でみる豊後における地震災害

大分県立先哲史料館・平井義人

はじめに

- (1) 大分県の防災計画の見直し
- (2) 活かされなかった記録からの警鐘
 - …飯沼勇義『仙台平野の歴史津波』（株式会社宝文堂・1995年）
 - 羽鳥徳太郎『歴史津波－その挙動を探る－』（海洋出版イルカぶっくす10・1977年）
 - 宇佐美龍雄『新編日本被害地震総覧』（東京大学出版会・1987年）
- (3) 松永伍一『旅びと』（偕成社・1984年）－国見での津波が描かれているが…

1 大分の被害地震・津波記録

- (1) 近代以前の被害地震 … 21回
 - (2) // 津波 … 5回
- } + 昭和21年の南海地震
- (3) 疑問点
 - ①大きな被害をもたらす地震の特徴…1県域を越えた広い範囲に地震記録がのこる
↓
2前後に多くの余震記録がのこる
孤立する記録は疑問
 - ②存在が疑われる地震
 - ・天正13年11月29日（1586年1月18日）地震 … 畿内・東海・東山・北陸を震源地とする連動型地震。大分の記録は信用できるか？
 - ・慶長9年12月16日（1605年2月3日）地震 … 津波の項で分析
 - ・寛永4年10月4日（1627年11月11日）地震 … 他に記録なし。誤りと判断。
 - ・天保12年9月27日（1841年11月10日）地震
… 熊本の史料にのみ出てくる。府内藩記録には見つからない。何故？
 - ③今後の史料調査が必要な地震
 - ・明応7年（1498年7月9日）地震 … 福岡・宮崎・山口・愛媛に記録があるが、大分では見つからない。－出てくる可能性は高いのでは

2 津波を伴った地震の震源地およびその特徴

- (1) 歴史の中の地震→震源地が何故わかるのか

(2) 各津波地震の震源地

津波	和暦(西暦)	名称	震源地
I	天正13年(1586)	…	不明
II	慶長元年(1596)	慶長豊後地震	別府湾-日出生断層帯
III	宝永4年(1707)	宝永四年地震	南海トラフ(西部)
×	寛文2年(1662)	寛文二年地震	日向灘何部→大分に津波被害なし
IV	明和6年(1769)	明和六年	日向灘北部
V	安政元年(1854)	安政南海地震	南海トラフ
VI	昭和21年(1946)	昭和二一年南海地震	南海トラフ

※) 慶長9年12月16日(1605年2月3日) … 南海トラフ

⇒「慶長大地震」津波被害による溺死者は約5,000人

○大分県内では記録がみつからない

そもそも九州では鹿児島のみ。しかも、西目(現阿久根市周辺)→疑問
揺れによる被害は少ない

→大分に津波をもたらす地震の震源地は、

①南海トラフ・②日向灘断層帯・③別府湾-日出生断層帯… P5の図参照



図1) 南海トラフ

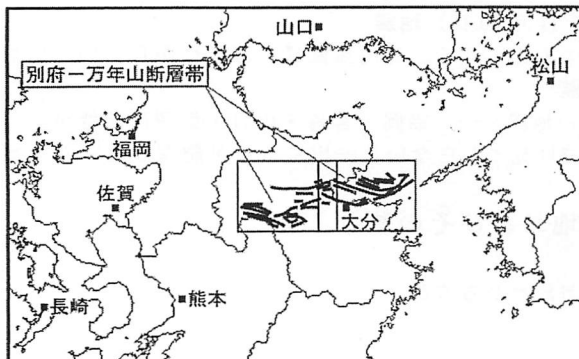


図2) 別府湾-日出生断層帯
(別府-万年山断層帯の東側)

(2) 震源地ごとの津波の特徴

① 南海トラフ

- ・ 宝永四年地震(1707年)…米水津浦代浦で遡上高 11.5 m
- ・ 安政南海地震(1854年)…津波高九尺(3m弱) ※遡上高ではない
宝永四年地震によって高台に移した庄屋屋敷の床浸水
- ・ 昭和の南海地震(1946年)…(2010年3月に長野浩典氏が近代史研究会で報告)
津波高 佐伯で 1.4 m
特殊現象として、海水の濁り、不漁、発光現象など

○津波の規模 - 最大規模

○地震の到達スピード…レジュメ末「昭和21年南海地震と津波到達時間」参照

② 日向灘断層北部 … 明和六年日向灘地震(1769年)

- 津波高 ・ 臼杵…汐入田畑荒 2,666 歩→2~2.5 m
- ・ 蒲江…津波被害の記録有り→少なくとも 2 m

③ 別府湾-日出生断層帯 … 慶長豊後地震(1596年)

○地震の到達スピード

○局地的津波高

- ・ 奈多…奈多人幡の社殿流失(地盤高 6.1 m) →遡上高 6~8 m…?問題有り
- ・ 佐賀関…関神社の鳥居倒壊(同 4 m) 社殿浸水(それより高い) →6~7 m

(3) 小結

- ① 大分に最大の津波をもたらす地震は南海トラフを震源とするものである。
…四国沖から日向灘を回り込んで県南に最大の被害をもたらし、別府湾・国東半島・豊前海域へと入り込む
- ② 文献上の過去最大の津波高は宝永4年南海地震における米水津浦代浦の遡上高 11.5 m である。…津波高と津波の遡上高は明確に区別すべし
- ③ 慶長豊後地震(別府湾-日出生断層帯を震源とする地震)による津波は、宝永四年地震(南海トラフを震源とする、大分にとって有史以後最大級の地震)による津波を局地的には超えていた。
- ④ 別府湾-日出生断層帯を震源とする地震による津波は、震源地が近いだけに、揺れと津波の間の時間が短い。
- ⑤ 国東以北には津波の襲来を記録した古文書は見つからなかった →※

3 慶長豊後地震に係る疑問点

(1) 発生日時の問題 … 従来は旧暦7月12日とされてきた が→

- i) 「興導寺大般若経奥書」 = 7月9日
 - ii) 「由原宮年代略記」 = 7月9日
 - iii) 「柴山勘兵衛記」 = 7月9日
- ⇒ 3日前とする記録が3件も…何故?
- 異名本「津山氏世譜」 = 7月13日

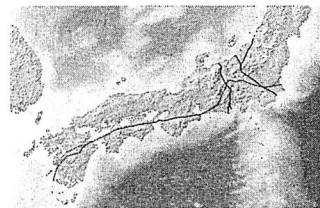
逆に1日後に書き換えられる

● 7月9日 慶長伊予地震の存在

(2) 直後の地震との関連

… 慶長伏見地震 = 7月13日

→ 全て中央構造線上?



※慶長元年7月の地震

	発生日旧暦	西暦	発生時間
慶長伊予地震	文禄5年7月9日	1596年9月1日	夜
慶長豊後地震	文禄5年7月12日	1596年9月4日	午後4時頃(津波)
慶長伏見地震	文禄5年7月13日	1596年9月5日	12日深夜から午前0時頃

→この一連の地震によって年号を文禄から慶長に変更

→津波は夕方…イェズ会士日本通信・由原宮年代略記をどう理解したらよいか?

→それぞれの発生日時がこれで良いのかというところから議論し直されている

(3) 津波到達範囲 →⑩「興導寺大般若經奥書」=津波被害が読み取れない…何故?
現在考えられている震源地の位置からは国東は近い

→しかし(1)の関連で震源地想定が混乱し実際より西にずれていないか?

4 南海地震に係る疑問点

(1) 津波高の地域偏差

(2) 龍神池地層調査の結果

顕著な砂層は7枚 … ① 1707年=宝永四年地震 ② 1361年=正平年間?

③ 684年=天武? ④~⑦…有史以前

→慶長大地震(1605)・安政南海地震(1854)の痕跡はない…何故?

(3) 津波到達時間と潮位…国東以北は宝永・安政いずれも干潮時だった←※

おわりに

(1) 過去の記録の限界

①周防灘断層を震源とする地震(断層の形成は有史以前?) …次頁参照

→史料では確認できなかった

…同じ断層型地震として慶長豊後地震を参考とする他はない=5m超の津波

②南海地震と日向灘地震の連動(今後新たに起こると予想されること)

→巨大化の恐れあり

(2) 大分県外の情況も参考に…fe.延岡

宝永四年地震…津波を正面から受けた延岡では板田橋・大瀬橋まで

→大分では?()

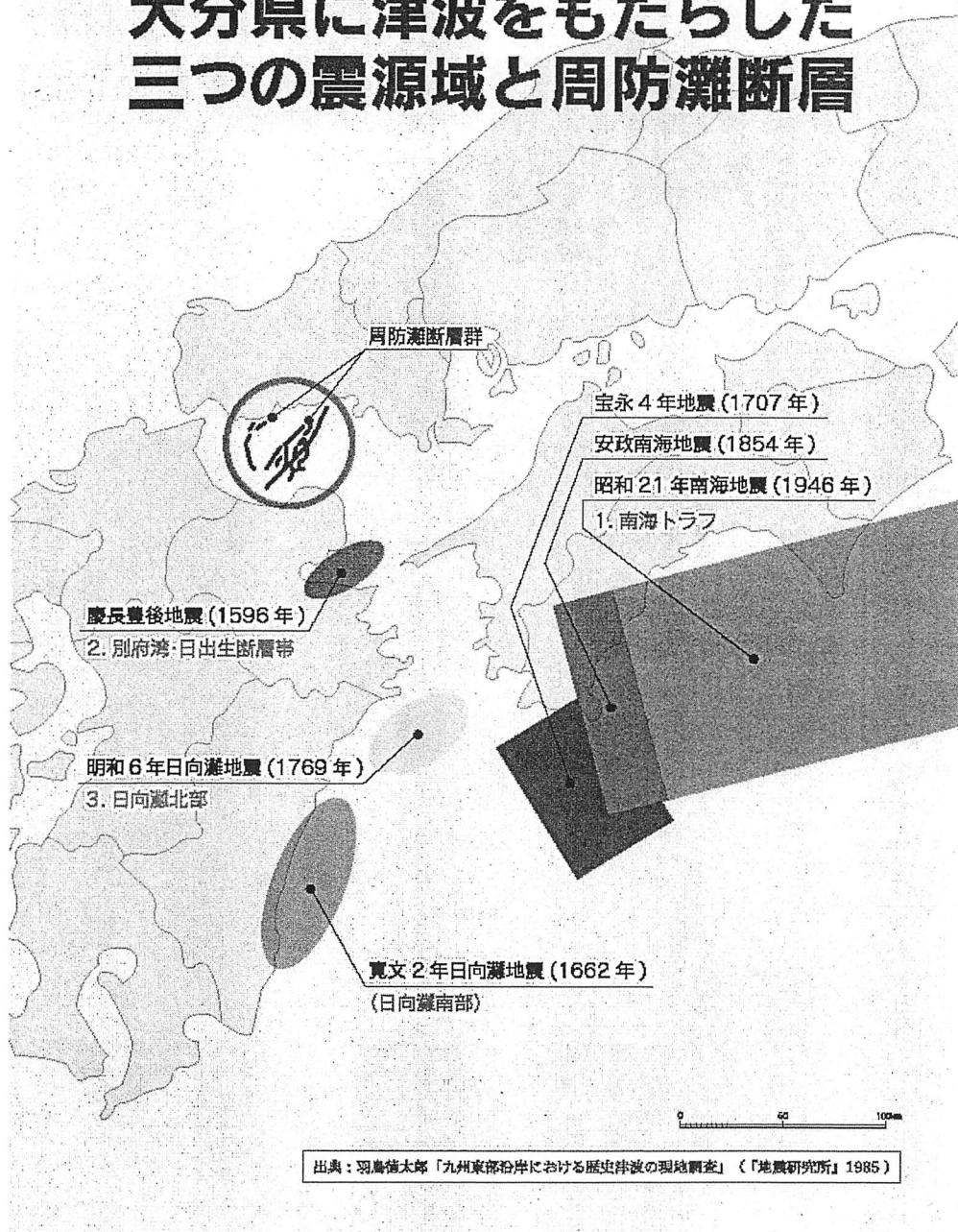
(3) 宝永四年地震の際の避難誘導(佐伯藩の史料参照)

→疑問を感じないか?()

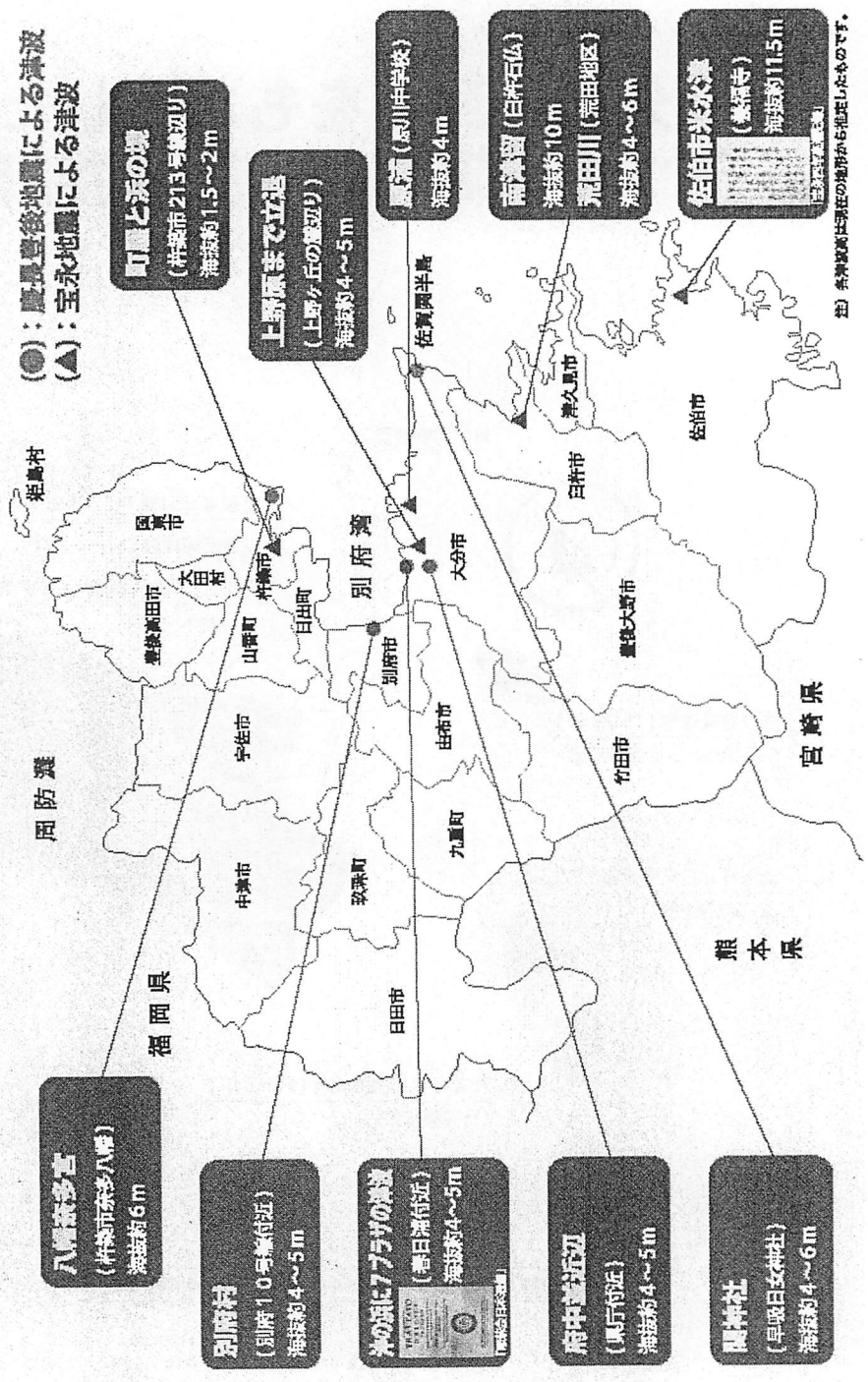
(4) 過去の記録を検証する権利…100年後200年後の人たちへも

※古文書の保存も防災対策の一つである!

大分県に津波をもたらした 三つの震源域と周防灘断層



古文書に記された津波被害箇所と津波高



注) 各津波高は原住の地帯から推定したものです。

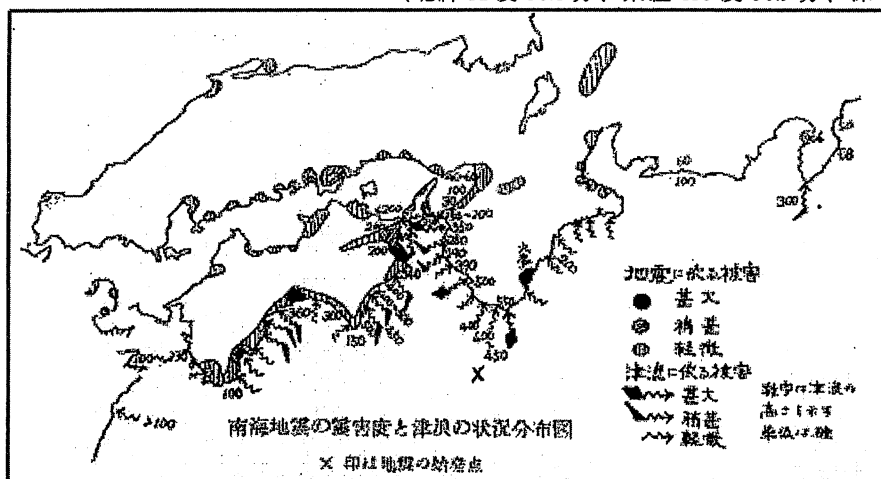
昭和21年南海地震と津波到達時間

参考資料：「昭和21年南海大地震報告津波篇」

『水路要報増刊号』書誌第201号（昭和23年3月31日・水路部）

1 発生日時 : 昭和21年12月21日午前4時19分04秒

2 震源地 : 和歌山県潮岬南南西沖 78 km
(北緯32度56.1分、東経135度50.9分、深さ24 km)



※画像は「兵庫県地域の風水害対策情報」のサイトより

3 規模 : M8.0

4 津波記録

場所	来襲状況	間隔	回数	最大波	来襲時刻	津波高	※	速さ
佐伯	引潮にて始まり、高潮性	30-40	3		170	1.4	0.10	
大野川	初め引かず		3	2	130	0.42	0.33	
大分	引潮にて始まり、高潮性	120	7		238	0.8	0.40	
別府	引潮にて始まり、うねりの大きい程度				210	0.7	0.40	大人の歩く程度

※平水上の値を求めるに加算すべき常数

注) 間隔・来襲時刻の単位は分、最大波・津波高の単位はmと考えられる。

5 評価 : 近代の記録であっても、戦直後という社会状況のためか、津波襲来時刻の記録にはかなりのばらつきがある。これは、本統計が機器類からのデータではなく、各地域からの聞き取りによっても構成されていることによるものと考えられ、時間の誤差は初発あるいは初期の津波を見落とした地域があったことによるものである。本記録を総合的に理解するならば、南海トラフを震源とする地震津波では、震源地が潮岬の南あたりの場合、大分県の佐伯市に到達するのがおよそ1時間後（同資料には宇和島・三崎・八幡浜に1時間から1時間超後に襲来したというデータがある）、大分・別府には2時間超後であった、と整理することができよう。また、同じ南海地震でも、日向灘に近い場所を震源とした場合、距離差から考えて、到達時間は半減あるいは3分の1（佐伯-20~30分後・大分-40~60分後）程度になるものと想像される。

大分に被害をもたらした地震・津波

地震	津波	和暦	西暦	記事他
1		天武7年	679年	豊後国風土記。地震により五馬山崩落
		天武13年	684年11月29日	高知に記録あるが大分には見つからない
2		貞観9年1月20日	867年 3月 4日	三代実録。鶴見山噴火
		仁和3年	887年8月26日	京都に記録あり、その後信州
		文明11年11月18日	1480年1月8日	方寿寺地陥没、池となる。地震なのか？
		? 明応7年	1498年7月9日	福岡・宮崎・山口・愛媛に記録あるも大分不明
3	I	? 天正13年11月29日	1586年1月18日	萩原・三佐・大在、海中に流没
4		慶長元年閏7月9日	1596年9月1日	※下記地震と記事が同じ…何故？
5	II	慶長元年閏7月12日	1596年9月4日	「慶長豊後地震」沖浜海没
6		慶長2年7月29日	1597年9月10日	鶴見岳爆発
		慶長8年10月13日	1603年11月15日	被害実体が不明
		? 慶長9年12月16日	1605年2月3日	四国で津波被害大。大分では記録見つからず。
		? 寛永4年10月4日	1627年11月11日	宝永の誤りか？
	★	寛文2年9月20日	1662年10月31日	延岡に2mの津波あるも大分に被害記録無し。
7		寛文3年1月8日	1663年2月15日	皆田家録。豊後久住山中…噴火
8		元禄11年9月21日	1698年10月24日	府内藩記録。府内・岡地震被害
9		元禄16年11月23日	1703年12月31日	府内藩に地震被害。楽只堂年録にもあり
10		宝永2年閏4月2日	1705年5月24日	中川史料集。岡藩大地震
11	III	宝永4年10月4日	1707年10月28日	「宝永四年地震」
12		正徳5年8月4日	1715年9月1日	地震・海鳴
13		享保8年11-12月	1723年12-1月	大分に地震ありと十三朝紀聞記す
		享保10年10月4日	1725年11月8日	大分には記録なし
		享保10年11月15日	1725年12月19日	温故年表録。曰杵地震強く震ふ→被害記録無し
		元文3年6月28日	1738年8月13日	九重山に新火口
14		寛延2年4月10日	1749年5月25日	府内藩記録。千石橋大破
		明和2年4月18-19日	1765年6月6-7日	温故年表録。被害記録無し
15	IV	明和6年7月28日	1769年8月29日	佐伯高潮
		文化13年12月18日	1817年2月3日	温故年表録。豊後曰杵地震強し。被害記録無し
16	?	天保12年9月27日	1841年11月10日	鶴崎地方地震。熊本に遺る史料。府内藩記録無し
17	V	安政元年11月4-7日	1854年12月23-26日	「安政南海地震」
18		安政2年6月24日	1855年8月6日	杵築城内破損
19		安政2年11月2日	1855年12月11日	大地震。立石地方にて古今未曾有の震災。
20		安政4年8月25日	1857年10月12日	理科年表。諸城破損。震源は大分三崎半島線東
21	VI	昭和21年12月21日	1946年	佐伯に津波あり。

資料編—大分県における地震・津波の被害記録—

注) ○は宇佐美龍夫『最新版日本被害地震総覧』(東京大学出版会・2003)による
も、大分県における具体的記録が見つからなかったもの

□ は津波を伴った地震

アラビア数字の順番に、大分で被害記録がある地震(1~21)

ローマ数字の順番に、大分を実際に襲った津波(I~VI)

1 天武7年(西暦679年)地震

①「豊後国風土記」

五馬山。在郡南

昔者。此山有土蜘蛛。名曰五馬媛。因曰五馬山。飛鳥浄御原宮御宇天皇御世。戊寅年。大有地震。山岡裂崩。此山一峽崩落。温之泉處々而出。…

○天武13年(西暦684年11月29日)津波 … 高知に記録あり

2 貞観9年1月20日(西暦867年3月4日) 噴火

①「速見郡史」

鶴見山爆發して其形を失えり。

②「三代実録」

大宰府言、従五位上火男神従五位下火壳神二社在豊後国鶴見山嶺、山頂有三池、一池泥水色青、一池黒一池赤、…

○仁和3年(西暦887年8月26日)津波 … 京都に記録あり。その後信州

※ 文明11年11月18日(西暦1480年1月8日) 陥没 → 地震なのか?

①「続史愚抄」

此日、豊後国万寿寺地陥、忽成池、住僧百餘人、堂舎已下、俱入地中

豊後の万寿寺と云う寺あり、東福寺の末寺にて、禅宗也、住僧百餘人の在所にて、諸堂同備、富貴寺也。11月18日俄に地の底へ悉背にへ入りて、其所池となりけり、其内沙弥1人、喝食1人、厠にありて逃げり此兩人は助かるべき故にや、厠ばかり残りけりなん此寺衆僧乱行不思議の故云々希代不思議の事也

○明応7年(西暦1498年7月9日)地震 … 福岡・宮崎・山口・愛媛に記録あり

3-I □天正13年11月29日(西暦1586年1月18日)地震・津波

①「別府史談」…『大分縣災害誌 資料編』(大分測候所・1952)

大地震、大津波大分郡萩原、三佐、海部郡大在地方の海浜数里、海中に流没す

4 慶長元年閏7月9日(西暦1596年9月1日)地震

①「興導寺大般若経奥書」→内容は三日後の慶長豊後地震

文禄五年丙申閏七月九日大地震仕、豊後奥浜悉く海成人畜二千余死ス、前代未聞条書付申候畢

②「由原宮年代略記」→内容は三日後の慶長豊後地震

(慶長元年)閏七月九日、戌刻、大地震、当社拝殿廻廊諸末社悉く顛倒ス。…

③「柴山勘兵衛記」→内容は三日後の慶長豊後地震

同(慶長元年七月)九日大地震シテ、沖濱ノ浦ヨリ潮オビタゞシクセキ上

5-II 慶長元年閏7月12日(西暦1596年9月4日)地震・陥没・津波

①「豊後速見郡史」

大地震海嘯あり、瓜生島遂に海底に陥没す、

②「別府史談」

大地震、大津波瓜生島及び別府村海中に陥没し、戸数千余、死者八百余人を出す、高碓山、浜脇村田野口、鍋山、由布、椿山等崩る。

③「坂の市郷土史」

地震により田畑塩田の流没60余町歩におよび、亦同日瓜生島も陥没せり。

④「イエズス会日本報告集第I期 第二巻 同朋舎」

〈1596年12月28日付長崎発信 ルイス・フロイスの年報補遺〉「豊後の国(の地震と津波)について」 豊後で起こった地震は非常に大きくて恐るべきものであり、もしキリシタンたちがそこから来て話さなかったなら(事実とは)信じられぬほどのものであった。我らは非常に立派で、豊後のキリシタンの中ではもっとも古いプラス(という教名の信徒)の来訪を待っていたが、彼はやつと非常な危険を免れてここへ来た。彼はこう言った。「私は今でも[その時は地震から二ヶ月が経っていたが]十分に平静さを取り戻していません。また故郷が崩壊しているのを見て生じた恐怖を払い除けることもできません」と。府内に近く三千(歩)離れたところに、沖の浜と言われ多数の船の停泊港である大きな集落、または村落があり、この地に因んで沖の浜のプラスと呼ばれているこの善良な男は、他の諸国から集まって来る種々の人々に自分の家を宿泊所として提供していることから、豊後では非常に有名である。彼は(地震のことを)こういった。或る夜突然何ら風にあおられぬのに、その地へ波が二度三度と(押し寄せ)、非常なざわめきと轟音をもって岸辺を洗い、町よりも七ブラザ以上の高さで(波が)打ち寄せた。このことはその後、或る非常に丈の高い古木の頂上によって知られたことである。そこで同じ勢いで打ち寄せた津波は、およそ千五百(歩)以上も陸地に浸水し、また引き返す津波はすべてを沖の浜の町とともに呑み込んでしまった。これらの界限以外にいた人々だけが危険を免れた。それにしてもあの地獄のような深淵は、男も女も子供も雄牛も牝牛も家もその他いっさいのものをすべていっしょに奪い去り、陸地のその場には何もなかったかのようにあらゆるものが海に変わったように思われた。プラスはそのとき妻や子供や召使いたちと家にいたが、同様な事態を頭の中で考えることができる以前に、一瞬のうちに木造であった家もろとも津波にさらわれているのが判った。妻は子供たちといっしょに溺死したが、彼は泳いで難を逃れたものの、どのようにして助かったのか判らなかつた。なぜなら彼は波の力でその場所から遠方へ運び去られていたからである。…沖の浜近くで、同様な海難に遭遇した他の四ヶ所、すなわちハマオキ、エクロ、日出、カシカナロ、それに《佐賀関》{サガノセキ}の一部が、人々の言うところでは冠水したとのことである。…これらの停泊港、とりわけ沖の浜には

多数の船が停泊していたが、それらの多くは太閤のもので、現在彼によって領有されている諸国の貢物を運送するために豊後に来ていたのであった。これらの船の多くは、すでに積み荷を終って出港の時を待っていたもので、また或る船はすでに積み荷を始めていた。これら（の船）以外に、そこには種々の商人たちの小舟が無数に停泊していた。プラスはこう言っていた。「私はこれらすべてがあるいは破碎するか、あるいは同じ場所で沈没してしまっただけで一隻も損傷を受けずにはすまなかった事を確認した」と。…この地震で（府内）は非常な荒廃に帰し、五千戸の家屋のうちわずか二百戸が残ったと伝えられている。また偶像崇拜者たちの寺院は二つしかなかったが、それらもまた倒壊した。…四千名以上のキリシタンたちが居住しており、またかの善良な老人ジョランが殉教の栄冠を受けた高田の町においても同じ頃に地震があり、海はある大きな川を横切って、およそ三千（歩）の境界線まで進み、その進行に際しては非常な騒音を出したため海辺に住んでいた人々は危険を逃れるためにわが家を捨てて田畑や山へ逃げた。その浸水は長くは続かなかったが、ひどい水害を与えずには水はほとんどの場所へひかなかった。なぜなら多数の家が倒壊し、また多くの人々が水死したからである。…府内から一日行程だけ離れた所にあった《由布院》（ユフイン）と呼ばれた或る地方では、…同地に迫っている山の一部分が、この地震によって、少数の者を除いて彼らのほとんどすべてを圧死させた。以上のことはこれまで我らの司祭たちや、自分の眼ですべてを見た、他の信頼に値する人々の書簡から集めることのできたものである。

⑤「玄与日記 群書類従」

《廿三日》（慶長元年閏七月）豊後国の内かまへと申ス浦へ御着船、（中略）八月三日にほといふ処へ着給ふ、（中略）それよりさかの関迄御着船被成候、去七月十二日之地震之時、かみの関と申浦里は、大波にひかれて家竈かまともなし、いのちを失ふもの数を知らず、哀なる事ともなり、

⑥「日本王国記 大航海時代叢書X I」

九月四日、非常に激しい地震が始まり、幾時間続いた。その後弱まったり、強まったりして幾日か続き、こうして、強弱の差はあれ、毎日毎夜ゆれ止まなかった。それは日本全土にわたる地震でもあった。もっともところによって、他の土地より一層はげしく、被害を被るということはあったが、なぜなら、日向の国では、上浜 Humfama という一つの町は水びたしになって、人家は跡形もなくなったばかりか、その後海まで湖ができたので、そこを船で往来したし、現在も船が往来しているからである。

⑦「豊国紀行 日本庶民生活史料集成 二巻」

此百二十年ほどまへの事なりしに、別府の辺大地震して、いにしへありし別府村悉く海となる。古への別府村は今の町の数町東に有。其所今は海となりて、其あともなし。昔の別府の村の西にありし温泉、今の別府の東の海辺にあり。潮干ぬれば、《かた》{（瀧）}の内に、所々温泉の流れいづ。潮湯なり。病をよく治すとして、入浴する者多し。今の別府は、其後、新にたてる町也。又昔の別府の北に近き所、久光と云ふ村、家数《千》{十}有しと云。是又地震によりて別府と一緒に海となる。今はなし。

⑧「梅園拾遺 日本随筆大成」

ちかく慶長元年の七月大地震、速見高碓山などでも石崩れ落ち、火出たるよし、府内の記事にみえたり、この時、かのあたり人七百人餘も損じたりとあり、

⑨省略

⑩「別府湯記」

古老予に告げて曰はく、此の谷や、昔日海水湧出し、陸居も亦た覆り、波捲つこと高崎の山を逾え、水怪しく鶴見の嶽を蕪す。須臾にして大地震動して、人家数百強一時にして没溺せり。所謂滄海の桑田を變ずるか、且つ惟へらく水關なるか、と。天地陰陽の測るべからざること亦た此の如し。時昔を考えるに、慶長の改元あり。年を今に経ること、殆ど九十餘歳なり、と。

⑪「興導寺大般若經典書」→慶長豊後地震の三日前とされる慶長伊予地震と同じ日文禄五年丙申閏七月九日大地震仕、豊後奥浜悉く海成人畜二千余死ス、前代未聞条書付申候畢

⑫「伊豫温古録(薬師寺記録)」

薬師寺、伊予郡保免村字寺ノ東に在り、旧と日照山医王院長国寺と号す、行基の開基にて古寺なり(中略)慶長元年閏大地震の時本堂仁王門崩るる由いひ伝う(現松山市余土)

⑬「豊城世譜」

慶長元年七月十二日当イワウ灘より津波起り、海辺都而沈没す。奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りなく沈没す。

⑭「佐賀関町史(佐賀関史)」

慶長元丙閏年七月十二日地震海嘯大に至り、関神社の鳥居倒れ、海水社殿を浸し、崖岸は壊崩し、家屋は倒潰し、関より大在に至るの間、畑田の流没六十余町歩に及ぶ。

⑮「稲葉家譜」

古老伝言。慶長元年丙申閏七月十二日大地震、海水溢陸地、没豊府沖浜之民戸十余町人多溺死。又曰此時潮水来白杵原山麓、今川崎藤八重昌宅前之坂口、及高田郷家島、人家之棟木佐賀郷佐賀関神社之鳥居流云、今案是歳大潮滅於往昔乎、雖然貞通遷鎮於白杵以来凡一百九年、所未聞也

⑯「由原官年代略記」

(慶長元年)閏七月九日、戌刻、大地震、当社拝殿廻廊諸末社悉く顛倒ス。又此日府中洪濤起テ、府中並近辺ノ邑里、悉く海底トナル。黄昏時分ナリ。同慈寺本堂斗相残ル。大波三時至ル

⑰「柴山勘兵衛記」→津山氏世譜は13日に改められている

同(慶長元年七月)九日大地震シテ、沖濱ノ浦ヨリ潮オビタダシクセキ上、大波立テ、両賀(勘兵衛の父)ノ屋敷海中ト成ル。重成(勘兵衛)イソギ家ノ系図ト度々ノ感状ノ入タル挟箱ト持鍵バカリヲ取出シテ、内室トタダ二人、家ノ屋根ヲ脇差ニテ切ヤブリ、二人共ニ屋根ノ上ニ居テ有リケル所ニ、七尋バカリ有ル舟板、家ノ上ニ流レカヽリタリ。是ヲ幸ノ事ト思ヒテ、二人共ニ乗テ有ケレバ、引潮ニ沖ニ引出サレテ、危キ事度々有リ。…

⑱「津山氏世譜」

一、同月(壬七月)十三日昼頃より大地震ニ而、大波ゆり上、居宅海中となる。重成室出産以後六日目の事なれハ、血も未治らす、出生の小児を抱て、夫婦共に天井に上ル。天井にも水上るゆへ、脇指にて屋萱を切破て…

6 慶長2年7月29日(西暦1597年9月10日)地震・大雨洪水

①「豊後速見郡史」

鶴見嶽爆發、洪水氾濫、久光島崩壊し、海門寺亦漂没するに至る。

②「別府史談」

大雨洪水、鶴見嶽崩れ、山潮出で朝見川を作り久光島を海中に流没す。久光島は租額 500 石の地なり。死者数知れず。

※ 慶長 8 年 10 月 13 日（西暦 1603 年 11 月 15 日）地震 → 被害実態が不明

①「豊後鶴崎町史・柴山勘兵衛記」

大へんゆる。亦其夜にも大きにゆる。亦翌日もゆるなり。

○慶長 9 年 12 月 16 日（西暦 1605 年 2 月 3 日）津波？

①「新編日本被害地震総覧」

…阿波の鞆浦で波高 10 丈（約 30 m）、死 100 余人、宍喰で波高 2 丈（約 6 m）、死 1,500 余（または 3,806 人）、…九州では東目（大隅）より西目（薩摩）の浜に大波来たる。上記以外の土地にも多くの被害が想像されるが古文書を欠き不明。…

→大分県内に正確な関係史料は見つからなかった

※ 寛永 4 年 10 月 4 日（西暦 1627 年 11 月 11 日）地震・津波

①「山香郷土史」

大地震あり。恒道村神塩鉱泉一時多量湧出せるが之よりさき慶長中の大地震にも湧出量を増したり

②「高田風土記・佐賀閩史」 → 「佐賀閩史」は宝永 4 年の誤り

塘切七十間程にて、流家拾三軒、倒家九十六軒あり

→大分測候所編『大分県災害誌資料編災害記録の部』による。しかし、誤りと判断

※ 寛文 2 年 9 月 20 日（西暦 1662 年 10 月 31 日）地震・津波…日向灘地震

19 日に地震、20 日に津波。大淀川河口に 5 m、延岡に 2 m の津波あるも大分に被害記録なし

7 寛文 3 年 1 月 8 日（西暦 1663 年 2 月 15 日）噴火

①「皆田家録」

豊後久住山中の御門寛文 3 年正月 8 日に燃へぬけ申す所のち地獄に成り云々

8 元禄 11 年 9 月 21 日（西暦 1698 年 10 月 24 日）地震

①「府内藩記録」

一、同日未ノ下刻地震ニ而西口御門二階櫓石垣共落崩倒其外櫓多門之壁落

②「豊府指南」

一、…十（九ヵ）月廿一日申ノ刻大地震、西ノ口岩瀬三郎右衛門預り櫓、御堀え落候。其外所々破損有之。

③「二豊小藩物語上」（竹田）

元禄十一年九月には大地震があり、人畜に被害、

④「直入郡志」

岡大地震 城中破損多く中川将監の邸潰る、九月二十一日

9 元禄 16 年 11 月 23 日（西暦 1703 年 12 月 31 日）地震

①「御用覚書」（府内藩）

（元禄十六年十一月二十三日）

一、同日今朝之地震ニて高長谷大石垣之上ニ大分石落申候、余程川ニ入申候、大井手ニも大分落石仕候由、大石垣之上かまら道不残引割申候、引割口壱寸四五分程相見申候、式間ニ三間高七八尺大石同所久兵衛東ニ井手ニ落込申候、甲斐田村茂平と申者供口罷成申候御年貢ニ参候刻高長谷にて落石ニうたれ死申候

②「楽只堂年録 百三十四」

松平対馬守知行所豊後国府内十一月廿二日之丑刻地震ニ而損亡

一、城中并侍屋敷町屋無別条

一、領分山奥式拾式ヶ村地震強シ

一、潰家二百七拾三軒、破損家三百六拾九軒

内石垣二千二百拾二間

一、田畑崩損 長二万二千拾間余 内石垣崩壱万五百六間

…

10 宝永 2 年閏 4 月 2 日（西暦 1705 年 5 月 24 日）地震

①「中川史料集」

一、閏四月朔日 岡大地震 御城中外在所々破損夥し 五月二日御届出る

②「二豊小藩物語上」

宝永二年四月にも大地震で岡城の石がきが崩れ、その修理に農民が狩り出された

11-III 宝永 4 年 10 月 4 日（西暦 1707 年 10 月 28 日）地震・津波

①「浦代浦成松庄屋文書」

一、宝永四亥年十月四日昼の八ツ時ニ南の方おびただしく鳴り、時を不移大地震致して、家内老人も不居立退候處、又、無程同時の下刻ニ波浦中ニ打渡シ、浦白は一面湖のごとく相見へ申候て、色利浦は田の尻より泥立、其俣にぎり、皆人出んと思候所ニ沖より網（船）さわぎ帰ルを見候處、波先ニて少々相見、汐差込事限りなく、浦々家財屋敷共ニ畠迄も流申候、浦白は養徳寺迄も汐差込程ニ御座候處、仏神の御加護ニて御座候哉、石壇ニ計残り申候、色利浦は尾花の山、峰押の山八合迄汐差込申候、東（風）網代は廣岡の山、本谷は尾花の下迄、又、峰押の下は坂口迄汐みち申候、西谷は廣岡の下墓原迄汐差込申候、色利浦ニて人貳人死ス、浦白ニて拾八人死ス、小浦・竹野浦ニては死人なし、其日北風少吹、克なきニて、成程暖成日寄故、色利浦は関網ニ流寄、其夜ふけて西嵐ニ成候處、家拾軒計沖え流出候、浦白・竹野浦の家は皆大形、ほそ越間浦へ流さる、荒々は大灘ニも出申候、又、宮野浦は高汐ニ家浮候とて其俣網をおきまわし候故、所々家財少も流不申候、其日より翌年迄漁事なく、皆々難儀致候へ共、宮野浦は浦からよし、殊ニ其時の損なき故、宝永五年中迄も替りなし、色利浦・浦白浦は汐も大分外浦よりみち地畠迄流候故、難儀致申候、左様成時、宮野浦のしわざ皆人ほめけり、…

一、其時の高汐ニ土佐・阿波・熊野地・大坂迄高波ニて大破損御座候、佐伯は下浦ニて浦

江浦・丸市尾浦大破ニ及申候、又、中濱は大嶋より蒲戸迄少も破損なし、代古浦より
蘆谷・堅田・木立村迄新地大分つふれ申候…

※「御手洗家文書（蒲江）」…記事なし

②「元禄宝永正徳享保日記（佐伯藩）」

一、今午ノ下刻、地震度々甚強く有之、…地震止候迄追付高潮城下江押込候故家中町等之
もの男女共ニ山ニ上り候様申付、城内江も無遠慮候間…

一、城下江潮差込候事昼夜七度、初兩度大分ニ而冠木門之内迄差込候、夫よりは段々少ニ
在之候由申候

③「臼杵藩日記分類頭書」

十月四日

一、未ノ上刻、甚地震・大波 此節委細之訳略之

十月朔日（五日カ）

一、大波ニ付相図ニ大鼓打候事

④「温故年表録（臼杵藩）」

十月四日未上刻大地震半時計過山潮湧出津浪大地如覆鳴動祇園洲海添町家共床上潮高三四
尺余海添川鱸河内南津留荒田川北津留北ノ川末廣革通邊潮溢溺死者不知員船乗船嶋逃退者
溺死…

⑤「府内藩記録」

…右地震以後潮時不成高潮兩度迄満申候付、被遊御見合、上原迄も可被成と被仰出候、然
共早速潮引申候、其後又潮満申候是又早速引落申候、依之御加中妻子共・町人共上野原へ
立退申候

⑥「三浦家年代記抄…大分市」

宝永四年、原浦杯津波来ル。地震ハ七日斗昼夜不止。村中不殘山ニ上ル。

⑦「杵築町役所日記」

一、…午ノ下刻大地震にて其後少々宛ゆり申事、其夜中迄十七八度程ニ而御座候右大地震
ニ而…（つぶれ屋四軒外の被害状況あり）…

一、右四日未之刻より亥刻迄汝四度満申候

但四度目ハ先頃之風雨之時分大形浜ニ汝上ケ申候

一、子ノ刻ニ一度但四度目ニ忒割程劣り申候

一、丑上刻ニ一度但半分程満其儘引申候

右之通以上六度満申候

⑧「橋津文書（宇佐）」

一、夜之内大地震ニ而数しれず

一七日之間也、其後も少々づゝ年は明正月迄もゆり申候、其後つなみ方々へ有、大
坂ハ家舟共ながれ川口もふさがり…土佐国も大坂同前也、是ハ御城斗被殘候

⑨「禅源寺年代記録（豊前下麻生村）」

同四亥十月四日午半刻斗地震、酉中刻迄度々震動不止、八日迄昼夜ニ三四度動ク

⑩「中津藩日記」

一、同四日 終日終夜晴天、午ノ下刻大地震同刻より夜中少ツゝ地震折々有之、無別條

一、十月五日 終日天氣能、夜中迄地震六度少ツゝ致候、其外無別條

⑪「中川史料集」

一、十月四日 岡大地震、御城中御月見の櫓崩れ其外御城内外在中破損多し、

⑫「三浦家文書（宮崎県延岡）」

未時前大地震 坂下御門脇石垣破損、同所堀下石垣同前、其外所々御家中鋪屋共に破損、
未時後東海大浪入河水濁逆流板田橋・大瀬橋辺迄浪至…

⑬「柳嘗日記」

四日／一、未後刻地震 十二日／去ル四日未刻東海道筋大地震ニ付大坂迄見分御用被仰付
ニ付若年寄被仰付候

1 2 正徳5年8月4日（西暦1715年9月1日）地震・海鳴

①「別府史談」

地震、海鳴人民山に逃る

1 3 享保8年11 - 12月（西暦1723年12月 - 1724年1月）地震

①「十三朝紀聞」

屋瓦落ち、石塔倒れ、倒壊家屋あり、餘震尽きを踰えたり

○享保10年10月4日（西暦1725年11月8日）… 大分に記録なし

※ 享保10年11月15日（西暦1725年12月19日）地震 →被害記録なし

①「温故年表録」

臼杵地強く震ふ

※ 元文3年6月28日（西暦1738年8月13日）噴火

①「皆田家宝歴」

九重山に新火口を生じ熱泥沸騰す

1 4 寛延2年4月10日（西暦1749年5月25日）地震

①「府内藩記録」

一、同年（寛延二己巳年）四月十日巳之中刻地震ニ付千石橋大破右ニ付五月廿四日前々之
場所江船板ニ而仮橋掛候様被仰付之

※ 明和2年4月18日 - 19日（西暦1765年6月6日 - 7日）地震 →被害記録なし

①「温故年表録」

豊後府内別府地震ふ

1 5 - IV 明和6年7月28日（西暦1769年8月29日）地震・津波

①「温故知新録」佐伯

七月廿八日八時半時過御在所強致地震候処津波打来候由風聞ニ而沖之様子高汐ニ而波立強
御城下諸人所々江駈集騒敷候ニ付…

…七月廿八日地震強、同夜中より翌廿九日朝迄雷雨強、…損毛左之通其旨御届有之候事

一、田畑高老万千百七十石余／一、御城石垣所々損候／一、潰家式百十五軒／右之外川除

道橋倒木等御届有之候事

②「御用日記」(佐伯)

(七月廿八日)

一、八時半時過頃強致地震候…

…

一、何ぞ津波と申程之義ニハ無之候得共、甚強地震後其上沖相高汐ニ而刻限不相応ニ汐之
差引暫時之間度々有之候付万一大変之程も難斗何茂無心元存候…

…

(八月二日)

一、蒲江浦御番人菅四郎右衛門申越候此間之地震ニ而御門瓦少々落、同左右塀損申候段申
越候付九左衛門へ申達、御番所附浦々御堂致御修復候様廻状ヲ以可申遣旨御勘定頭へ
申渡候

③「御会所日記」(臼杵)

豊後国臼杵私領分当七月廿五日暁より未ノ刻迄大風雨、同廿八日卯ノ刻より雷雨、申ノ刻
より地震強、八月朔日暁より酉ノ前迄大風雨仕、城内櫓・塀其外所破損仕、…

地震ニ付損所之覚

一、潰家 五百三拾老軒 但土蔵共ノ一、半潰家 貳百五拾三軒 …ノ一、潰入田畑荒貳
千六百六拾六歩 内 田方 六百四拾五歩 畑方 貳千貳拾老歩…

七月廿五日・八月朔日風雨ニ付損所之覚

一、潰家 貳百七拾五軒ノ一、半潰家 百九拾三軒…

④「府内藩記録」

一、明和六己丑年七月廿八日今八ツ時過頃大地震御城中其外御家中家敷大破六拾年以前之
大地震同様之儀ニ付町方土蔵等大破右地震最中大雷雨

※ 文化 13 年 12 月 18 日 (西曆 1817 年 2 月 3 日) 地震 →被害記録なし

①「温故年表録」

豊後臼杵地震強し、夜子の刻

16 天保 12 年 9 月 27 日 (西曆 1841 年 11 月 10 日) … 熊本に遺る史料のみ。府内藩
記録には記事なし。

①「熊本県史」

(9.27) 鶴崎地方地震で大被害

②「肥後近世史年表」

鶴崎地方地震、倒家破損多し

17-V 安政元年 11 月 4 日 - 7 日 (西曆 1854 年 12 月 23 日 - 26 日) 地震・津波

…安政南海地震=安政元年 11 月 5 日 (西曆 1854 年 12 月 24 日)

①「米水津色利浦文書 (塩月家文書)」

一、四日 辰下刻 地震 潮満干数度有之

一、五日 甲 (申) 下刻 大地震 高潮 度数不詳

色利浦平生満潮より九尺 壺番潮元屋敷(1)水神前

東風網代太七(2)方前迄

大庄屋所(3)床下迄、疊滯不申

荷物後ノ山へ持運び、大庄屋・皆合(4)・召仕の者

男女四五人相残、山へ致小屋掛居候、家内子供

ハ西谷孫右衛門方へ逃行候、

一、村方不残最寄の山端へ逃去、致小屋掛候

但、東風網代ハ廣岡、中江ハ尾はな並ニ薬師庵ノ上

一、浦廻り衆式人、土屋石右衛門殿・江藤源助殿被居合候

(1)最初に打ち寄せてきた潮。御手洗大庄屋のもとの屋敷。薬師下にあった

(2)穂積氏

(3)宝永の津波以後宮の下に移転

(4)かいごう。大庄屋付きの書役

②「御用日記」(佐伯)

(安政元年十一月)

一、昨四日朝四ツ半時頃軽き致地震、沖合汐不時満引有之不穩趣之处、今夕申之中刻大地震、沖合高波ニ而市中人氣不穩候ニ付、先年之御当りを以津波為相因大筒持せ、蟹日坂・中村外江小頭并足輕共差遣人氣相鎮可申哉と儀右衛門江申達候处、其通申聞候ニ付、火之廻之面々并手附見廻方足輕共市中立廻候様申付候

一、万一此上大地震・津波等有之候ハ、宝永四亥年之御当りを以大手搦御門開之、御家中并市中之者共立退候ハ、御城内江入可申哉と儀右衛門江申達候处、其通申聞候ニ付、夫々江申渡候

一、申ノ下刻、俄ニ高汐川内ニ込入、枡方大土手外水一面ニ相成、市中大ニ致騒動、御城内且御城山最寄江皆々逃登、人氣致恐怖候ニ付、私共始列座御役人共早速川筋江罷越致見分候处、汐折々急ニ満引有之、度々致地震、益騒立候故、儀右衛門様何茂火事装束ニ而会所江出座、御城内御締等夫々申付、猶又町奉行共市中相廻夫々及差戻候、夜中茂軽き地震不相止、御家中并市中之者共終夜山ノ手ニ罷在候ニ付、足輕共数人為立廻、火ノ元別而入念候様儀右衛門申聞候ニ付、夫々江申渡候

③「御会所日記」(白杵)

五日 晴れ 申ノ半刻過大地震ノ一、今申ノ半刻過地震ノ一方大動ノ城中所々御破損所有之ノ御城下方々大破ニ付、両月番始何茂追々登城ノ慶昌院様江は御内所御立退、御花畑江被成御座候付、何茂被出御機嫌相伺之、御用人代り合相詰、無程沖鳴動洪波打寄来、辻并戸辺等打揚ケ、御堀桂所石打返し、道洗ひ崩シ、大手御門内外も汐込入、祇園洲過半同様、地低之場所は通路難出来、右ニ付御門内住居之面々家内迄御城中江立退、御門外海辺之類は地高之場所は宮・畑江馳登り、其後も沖鳴潮差引繁ク震リ不穩、一統騒動甚敷、食事等難渡ニ付ノ御城下之分江握飯・粥等御救被下、御台所且町酒家等ニ而焚出申付也

○「〔白杵藩〕記録」(白杵)

同月(安政元年十一月)五日 一、五日申ノ半刻過大地震ノ方より詰口打寄、同七日辰ノ刻大地震有之委細雑之部ニ記置候、右ニ付被仰出候義者此部ニ記シ其外御口等夫々之部ニ記置候事

同月六日 一 大地震ニ付殿様為伺御機嫌今日九ツ時口口侍中御醫師登城小侍中今日口口江罷出候様右之趣被得其意支配有之面々者支配中江も可相違候旨御触有之

④「坂の市郷土史」

安政元年甲寅年 11 月 4 日酉の上刻（午後 5 時 30 分）より大地震がありて、酉の下刻（午後 6 時 30 分）より大海嘯に襲はれたのであつた。此の地震は 11 日間におよび、15 日の巳の刻（午前 10 時）に止んだとのことであるが漁船の顛覆家屋の倒潰流出夥しかったのである。

⑤「豊後鶴崎町史」

人家倒屋数 100 戸、定米 413 石支給

⑥「仲摩嘉左衛門伝…大分市高田」

15 日まで餘震あり、上徳丸村本塘筋 33 間破損

⑦「広瀬久兵衛日記」（府内在住時）

十一月四日 朝五ツ半過地震、暫、昼後三度、例刻汐満引去り、又八ツ時前高汐満ル

十一月五日 晴 申中刻大地震 汐数度満干有之 …少々地震之様ニ相覚候処、無程大地震ニ而北ノ口櫓も破却可致躰ニ相見候間、廿間程跡ニ戻り、平地ニ座し、震止候ニ而帰宅、暫時之事ニ候得共、北ノ口御多門并櫓共潰込ニは不相成候

⑧「山香郷土史」

安政元年 11 月 5 日地大に震う、前夜より屢々小動し、爾後震動止まず、7 日又大いに震う、人民皆掘立柱の茅屋を仮立し避けて之に居る。

⑨「山神百手日記」（杵築市山香町向野）

- 一 寅十一月五日七ツ時ニ大ぢしん、又、七日四ツ過ニ大ぢしん五日より者大分強候
- 一 此辺者家□□□そんじ方無之候、長須村家損方有之候、高田ニも少、づつ同様之事、東方ニ而ハ府内者大損之由
- 一 海辺大津なみにて損方強候由

⑩「寅日記<余瀬家文書>」（豊後高田市大字上香々地）

（十一月）五日

- 一 東蔵御立合にて倅罷出ル

- 一 夕方大地震

…

七日 祭り

- 一 朝、氏神祭礼、熊毛伝左衛門様三□□参る
- 一 朝五ツ下頃、大地震ニ而殊の外心配、当郡者別□之事も無之候得者、杵築領域下大損事、横なた・ふ内・鶴さき・乙津□□女中兩人即死、大火と成ル、米屋幸左衛門と申家共ハ大損事由

⑪「惣町大帳」（中津）

十一月／一、四日昼七ツ半時頃地震、尤輕シ、五日九ツ時輕シ、同日七ツ半時地震誠此辺ニ而は前代未聞之事、凡四半時程ゆり、泉水其外紺屋藍瓶等水あふれ出、酒醬油屋ハ無別条潰れ家無之、同夜五ツ時輕く四ツ半時強く、尤昼より輕八ツ時強く震、六日昼八ツ時輕くゆり、同夜五ツ半時同断七日五ツ半時強くユル、尤短シ、同日九ツ半時震中位、其後八日九日折々輕地震有之候へ共、格別之義は無之町中少々之破損有之候へ共潰家等一切無之此節之地震諸方は殊之外強く趣別而豊後府内御城下は八歩通潰れ家有之候由、其外鶴崎別府近所村々迄半潰家有之、竹田御城損候由、町家無別条、日出は輕く杵築は強御城破損町家四分通潰、浦辺ハ強く真玉ハ輕し、高田潰家三軒破損数々長須潰家三十軒余破損

百軒程、中須賀字佐辺も強く候へ共、潰家無候由、姫嶋地震出火ニ而一軒も不残趣ニ候、西は曾根辺は中津同様小倉御城下は当地よりハ強く黒崎三十軒程潰家其外九州不残大地震…

⑫「万年記」(国見町・竹田津村庄屋竹田津家文書)

一 十一月五日七ツ時分前代未聞ノ大地震 夫より通夜翌未明迄 八九度も地震度々ニテ家ノ内ニハ居得不申 外へ出候テ夜を明し申候

一 右地震ニテ来浦宮鳥居ニ候テ 宮崎石見娘七才ニ相成候ニ 辻懸リ候テ即死ノ由 其外処々ニ変異有之候由也

一 同七日五ツ時 亦々不相替大地震 誠忌怖難申候

一 去ル五日ノ地震姫島別シテ大変 居家 土蔵 厩杯都テ棟数八拾軒程倒家相成 石橋落 鳥居一基倒 庄屋元も被居不申 土蔵ニ移候よし 御分知飛脚千燈へ立寄候処 御城下至テノ大変 惣役所邊より六軒町互リ 多分ニ家所有之候由

…

一 去ル五日七日大地震より 冬中日々少しづつノ地震致候 其内平常ノ大地震と申位の儀ハ 度々有之候

18 安政2年6月24日(西暦1855年8月6日)地震

①「速見郡史」

地震あり、杵築城内破損す、幕府に請ひ、10ヶ年賦を以て2000両を借入れて修復す

19 安政2年11月2日(西暦1855年12月11日)地震

①「豊後立石史談」

大地震、立石地方にて古今未層有の震災、家屋の傾倒せるもの多く、2、3日は戸障子畳など持出し、仮小屋を設けて之に住みたる程なりき。江戸の大地震より後れたること30日、11月2日朝のことであつた。是れ大正12年の関東大震より実に69年前の事なり

20 安政4年8月25日(西暦1857年10月12日)地震

①「理科年表」

諸城破損 震源は大分三崎半島線の東方

21--VI 昭和21年12月21日(西暦1946年) 地震・津波 … 記事省略

参考文献

- 1 大分測候所編『大分県災害誌 資料編 災害記録の部』(大分測候所・1952年)
- 2 震災予防調査会編『大日本地震史料』(思文閣・1973年復刻)
- 3 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』(社団法人日本電気協会ほか・1981年～)
- 4 宇佐美龍夫編『新編 日本被害地震総覧』(東京大学出版会・1987年)
- 5 " 『最新版 日本被害地震総覧』(東京大学出版会・2003年) ほか

神 職

神職階位（神職の学識によって階位検定委員会が選考）

浄階（じょうかい）・・・・・・明階を得た後神道の研究に研鑽して業績をあげた者に与えられる。

明階（めいかい）・・・・・・4年の神道系大学を卒業の後(正階)2年の奉仕と研鑽をつんだ者。

正階（せいかい）・・・・・・一般神社の官司、別表社の禰宜に必要。

権正階（ごんせいかい） 正階以下は神職養成機関、階位検定講習などで与えられる。

直階（ちよっかい）

神職身分（経験功績によって身分選考委員会で決定）

		神職数	袍	袴
特級	表彰規定第二条第二号表彰者	91	黒綾	白固織
一級	表彰規定第二条第一号表彰者及び浄階で身分選考委選考	243	黒綾	紫固織
二級上	別表神社の官司・権官司及び二級で身分選考委選考	2066	赤綾	紫固織
二級	別表神社の官司・権官司及び三級で身分選考委選考	4579	赤綾	紫平絹
三級	権正階以上の階位を有する者	14563	緑綾	浅黄平絹
四級	その他の神職			

平成16年神職 合計 21542

職称

	官司	権官司	禰宜	権禰宜
別表神社	明階以上		正階以上	権正階以上
一般神社	権正階以上	なし	直階以上	